

子どもたちの生活とトイレ環境 2

— 京都教育大学附属桃山小学校トイレ改善プロジェクト 2 —

井上えり子¹⁾・藤田 加代²⁾・水島あかね³⁾・前田明日香⁴⁾

Children and the Restroom Environment 2

— The Restroom Improvement Project at Momoyama Elementary School Attached to Kyoto University of Education 2 —

Eriko INOUE, Kayo FUJITA, Akane MIZUSHIMA and Asuka MAEDA

抄 録：2006年6月から12月に附属桃山小学校で実施したトイレ改善プロジェクトについて報告する。昨年に引き続き2階女子トイレと2階3階の男子トイレを改善するため、ボランティア委員会の子どもたちと学生・教員が協力して磨き清掃とペンキ塗装を行った。くわえて、保護者とともに作成したトイレレットペーパーホルダーとトイレブラシを全ブースに設置した。事後調査の結果、プロジェクトにより児童のトイレ回数が増加し清掃意欲も高まったことが確認された。さらに参加学生の教育的指導力や実践力も向上した。

キーワード：生活教育 トイレ環境 トイレ改善 清掃指導

I. はじめに

筆者らは2005年7月より附属桃山小学校のトイレ環境の改善プロジェクトに取り組んできた¹⁾。その目的は、①健康で快適な生活を営むことができる学校空間の実現、②生活意識の向上と主体的に生活をつくりあげる力の養成、③教育現場における学生たちの指導力、実践力の育成である。

実地調査によりトイレ設備の老朽化とメンテナンスの不備を確認したため、全校児童を対象とした実態調査（トイレの使用実態と改善要求）を実施したところ、未改修の2階・3階トイレは、児童にとって「汚い・臭い・暗い・怖い」いわゆるトイレの4Kの状態であり、このため多くの子どもが小便や大便を我慢していることが明らかとなった。そこで、筆者らはトイレの4Kを除去、軽減する方法として磨き清掃とペンキ塗装を提案し、3階女子トイレを中心に児童・学生・教員が協力して行う利用者参加型の改善プロジェクトを実施したのである。事後

1) 京都教育大学, 2) 京都教育大学附属桃山小学校, 3) 一級建築士事務所ドディチ・ドディチ, 4) 京都教育大学教育学部4年生

調査の結果、本プロジェクトによって3割の児童はトイレ環境が改善されたと感じトイレ回数が増加したことが明らかとなった。さらに、プロジェクトに参加した学生たちの指導力や実践力の向上が確認された。

これらの成果を踏まえ、本年度（2006年6月～8月実践、12月事後調査実施）は2階女子トイレ、2階3階の男子トイレを中心に磨き清掃とペンキ塗装を実施した。本稿では、本年度の活動内容についてその成果を報告するとともに、2006年3月に本学学生を対象として実施したアンケート調査（以下、学生調査）と2005年7月に附属桃山小学校児童を対象として実施した調査（以下、児童調査）を比較することにより、小学校におけるトイレ環境の重要性について考察する。

Ⅱ. 方法

2006年5月に本年度の実施計画を筆者（井上・藤田）が立案した。2階女子トイレと2階3階男子トイレの磨き清掃とペンキ塗装の実施にくわえ、新たな取り組みとしてトイレブースにトイレブラシを設置することやトイレトーパーホルダーを手作りし設置することなどを決定した。

学生リーダーは井上研究室の前田明日香（家庭科教育4年）が努め、参加学生は井上の担当する初等家庭科教育（2006年前期、受講生65人）において募集することにした。実施期間は、実践活動は6月から8月に実施し、事後アンケート調査は12月に行うこととした。

本稿では、まず、児童調査と学生調査を比較して児童にとってのトイレ環境の重要性について検討し、次に実践内容について述べ、最後に事後アンケート調査から本プロジェクトの効果について検証したい。なお、論文の全体構成と執筆は井上が担当し、実践活動については主として藤田が、学生調査の分析は水島が担当した。

Ⅲ. 学生調査と児童調査の比較

3.1 学生調査の概要

2006年3月に、学生のトイレ使用状況の把握とマナーの啓発を目的として本学学生を対象とするアンケート調査を実施した。調査対象は2006年3月28日～30日に行われた在校生オリエンテーション参加者である。有効答数は614（回収率100%）であった。

アンケートの項目は①トイレ意識（大学のトイレが好きか嫌い、嫌いなところ、改善して欲しい点）、②使用実態（便意を感じたときにどうするか、我慢する理由、使用回数、誰と行くか、手洗いの習慣、大学で使用するトイレ様式（洋式・和式））、③家庭トイレの実態（様式・家庭で掃除するか）、④生活習慣（起床時間、就寝時間、食事習慣（朝食）、排泄習慣、健康状態）、⑤トイレマナー（トイレトーパーの補充、水流による消音、汚物処理、ブラシの使用）

表1 学校トイレの嫌いなところ (%)

項目	児童調査	学生調査
臭い	74.7	55.8
汚い	74.4	68.2
洋便器が足りない	34.4	15.6
紙がない	35.1	8.9
狭い	40.5	16.1
のぞかれそう	25.6	3.9
男女の入り口が近い	21.0	1.2
小便大便の音が聞かれそう	37.3	21.4
じめじめしている	44.1	31.4
暗い	53.2	52.4
小便器の間隔が狭い	19.7	2.7
鍵がしまりにくい(壊れている)	25.8	13.0
水が流れない	39.1	21.0
荷物が置けない	34.8	56.1
寒々しい(ひんやりとしている)	25.1	43.6
(小便器が高い)	8.1	項目なし
その他	9.5	5.8

() は児童調査の表現

答えている。トイレの老朽化の程度やメンテナンスの状況については、大学と附属桃山小学校はほぼ同程度であり、トイレに対する使用者の意識も同様の状況にあるといえよう。

表1は学校トイレの嫌いなところを尋ねた項目の比較である。「荷物が置けない」と「寒々しい」以外の項目ですべて児童調査の方が高い割合を示している。学生調査に比較して児童調査の特徴的な点はプライバシーの問題である。「のぞかれそう」「男女の入り口が近い」「小便大便の音が聞かれそう」「小便器の間隔が狭い」の各項目は、学生調査に比べ極めて高い値を示しており、児童がよりプライバシーに敏感であることが分かる。

メンテナンスの点では「臭い」、マナーの点では「紙がない」が学生調査に比べ非常に高い値を示している。

また、設備の点でも「狭い」「水が流れない」「鍵が壊れている」「洋便器不足」は児童調査が学生調査のほぼ2倍以上の数値となっており、子どもたちがつよい不満をもっていることが理解されよう。洋便器の数についてみれば、大学校舎内の洋便器の割合は20% (40個)であるのに対し、附属桃山小学校は10% (3個)であり、桃山小学校の設備の不備は早急に改善すべき事項であるといえる。

自由記述では、両調査ともトイレの3K (臭い・汚い・暗い) の改善や排水の改善、洋便器の設置、音姫やウォッシュレットの設置を希望する意見が多数を占めた。子どもたちも学生も家庭や商業施設と同様、明るく清潔で最新の設備が装備されたトイレを望んでいるといえよう。

3.1.2 トイレの使用実態

児童調査によると、小便で2割、大便で5割弱の児童が便意を感じても我慢しており、学校でほとんどトイレに行かない (0~1回) 児童が約2割、そのうち一度も行かないと答えた児童が7%もいた。その理由としては7割が「汚いから・くさいから」などメンテナンスの問題

である。

児童調査 (2005年7月12日実施、全児童441人、回収率100%) では、⑤のトイレマナーが「清掃状況 (家庭でトイレ掃除をしているか、学校できちんとトイレ掃除をしているか)」であるが、その他の項目はほぼ同様である。以下では学生調査と児童調査を比較検討したい。

3.1.1 トイレ意識

児童調査では3分の1の子どもが学校トイレを「嫌い」と答えていた。学生調査においても大学のトイレについて「好き」8%に対し「嫌い」33%、「どちらでもない」が64%であり、児童と同じく約3分の1の学生が大学トイレについて「嫌い」と

を挙げ、2割程度が「落ち着かないから」「はずかしいから」など心理的な理由や「休み時間が短いから」など時間上の問題であった。

これに対して、学生調査では小便は98%の学生が「しなくなったら大学です」と回答しており、我慢すると答えたものはごく僅かである。大便については約2割の学生が我慢すると回答している。大便を我慢する理由としては、「落ち着かないから」(53%)「はずかしいから」(15%)といった心理的な理由が約7割を占め、「汚いから・臭いから」(20%)、「休み時間が短いから」(9%)が続く。1日のトイレの使用回数では、ほとんど行かない(0~1回)学生は児童と同じく2割であるが、一度も行かないと答えた学生は1%にも満たない。

トイレの老朽化の程度やメンテナンスの状況については、大学と附属桃山小学校は同程度であるので、調査結果からみると、児童はトイレ環境から影響を受けやすいとみてよいだろう。すなわち、学生の場合は多少汚くても便意を感じたら排泄するが、児童の場合は我慢する傾向にあるといえる。

いっぽう、いつも1人でトイレを利用する児童は4分の1にすぎず、全体の4分の3がトイレを友人といっしょに利用していると答えている。学生調査ではいつも1人で利用するものは36%であり、全体の3分の2が友人といっしょに利用した経験があると答えている。児童にとっても学生にとってトイレはコミュニケーションの場であるが、その割合は児童の方やや多いといえる。

手洗いの習慣については、児童の場合は8割、学生は98%が「いつも手を洗う」と答えるなど手洗いの習慣はほぼ形成されているとみてよいだろう。

和式と洋式いずれの便器を使用しているかを問う設問では、児童調査では和式は24%、洋式34%両方使用が42%であった。附属桃山小学校の洋便器は男子1、女子2(全体の10%)であり、洋便器の使用頻度は極めて高い。学生調査では和式が56%、洋式が13%、どちらも使うが31%であった。大学の洋便器の割合は20%であり、ここでも洋便器の使用頻度は高いといえる。しかし、子どもたちの方が学生より洋便器を好むことは明らかである。

3.1.3 家庭トイレの状況

家庭トイレの様式を尋ねたところ、児童の90%が洋式と答え、両方あると答えた児童を合わせると96%の家庭が洋便器を設置していた。学生では89%が洋式と答え、両方あると答えた学生を合わせると93%の家庭が洋便器を設置している。このように家庭トイレの洋式化は進んでいる。

「自宅でトイレを汚したときは自分で掃除しますか」という設問では、「かならず掃除する」と答えた児童は37%、「ときどき掃除する」が30%であった。約7割の児童が家庭でトイレを汚したときに自分で掃除した経験があるが、33%が「掃除しない」と答えていた。学生調査では「必ず掃除する」が68%、「ときどき掃除する」が26%、「掃除しない」が6%であった。児童に比べ、学生の「掃除しない」割合は少ないが、それでも自分が汚した便器を家族に掃除してもらっている学生がいる。これは基本的なしつけの問題であり、児童期から適切なマナーを身につけることが重要であると考えられる。

3.1.4 生活習慣

9割の児童が登校日は7時30分までに起きているが、夜9時までに就寝する児童は全体の2

表2 健康状態 (%)

項目	児童調査	学生調査
胃の調子がおかしい	14.0	24.3
便秘しやすい	11.8	33.8
食事がおいしく食べられない	8.1	2.9
下痢しやすい	11.5	22.4
だるくなりやすい	29.0	35.5
足が重い感じがする	18.3	14.3
元気がでない	17.6	19.4
頭が痛くなりやすい	26.2	23.6
目まいがしやすい	14.7	19.4
風邪をひきやすい	19.5	17.1
夜よく眠れない	41.4	17.9
手足がしびれる感じがする	21.5	2.9
心臓がどきどきしやすい	15.6	8.0
足が腫れぼったい	4.3	4.2
いろんなことによくいららする	28.3	24.7
心配ごとがある	30.1	35.3

の児童が「ときどき食べない」と答え、僅かであるが「いつも食べない」児童もいる。学生調査では「いつも食べる」が59%、「ときどき食べない」が29%、「いつも食べない」が12%であり、4割の学生に朝食の欠食がみられる。

排便習慣をみると、毎朝自宅で大便を済ます児童は25%であり、「たまにする」が48%、「あまりしない」が27%であった。排便の回数は1日1回以上が50%、週に4回～3回が33%、2回～1回が14%、1週間以上しないことがあるが3%であった。排便習慣は、学生調査においてもほぼ同様の結果がみられた。毎朝自宅で大便を済ます学生は25%、「たまにする」が48%、「あまりしない」が27%である。排便の回数は1日1回以上が49%、週に4回～3回が40%、週に2回～1回が9%、1週間以上しないことがあるが2%である。毎日の排便習慣は健康をまもるために必要であるが、児童、学生ともその半数が毎日排便しておらず、排便習慣上の問題を指摘することができる。

表2は健康状態を尋ねた結果を示したものである。児童の4割が「夜よく眠れない」と答え、3割が「だるくなりやすい」などの不調を感じ、「心配ごとがある」「いららする」「頭痛」「手足のしびれ」なども2割以上の児童が「ある」と答えている。とくに、「夜よく眠れない」は学生の2倍以上にのぼり、児童の睡眠習慣の改善は緊急の課題である。

学生についても3分の1が「便秘しやすい」「だるくなりやすい」と答え、2割を超えるものが「胃の調子がおかしい」「下痢しやすい」「頭がいたくなりやすい」などの身体の不調を感じている。さらに、3人に1人が「心配ごとがある」、4人に1人が「いららする」と答えるなど精神的にもつよいストレスを感じていることが分かる。これらの要因は複合的であるが、そのひとつとして先にみた生活習慣の問題が指摘できよう。食事や排泄、睡眠など基本的な生活習慣の重要性を啓発する必要があるといえる。

割に満たず、高学年では11時半以降に就寝するものが3割を占めている。子どもたちは全体として遅く寝て早く起きる傾向にあり睡眠習慣に問題がある。これに対して8割の学生は「7時すぎ」までに起床するが、2割が8時以降に起床している。夜12時までに就寝する学生は36%であり、64%が12時以降に就寝し、深夜2時以降に就寝するものも21%にのぼる。全体として夜型の生活である。

朝食の習慣は、8割以上の児童がいつも朝食を食べるが、2割弱

3.2 子どもにとってのトイレ環境の重要性

以上の結果から、子どもたちは学生よりもトイレ環境に敏感であり、便意を感じても環境が悪い場合は我慢する傾向にあることが明らかになった。また、現在のトイレの設備やメンテナンスに対してつよい不満を持っており、附属桃山小学校におけるトイレ環境の整備は子どもたちの健康を守るために不可欠な事項であるといえる。友人といっしょにトイレに行く割合も児童の方が多く、トイレはコミュニケーションの場としての機能を果たしており、この点においても快適性が求められるのである。

さらに、子どもたちの健康状態をみると、4割が睡眠に問題をかかえ、約3割が強い精神的ストレスを感じるなど、生活習慣の改善が急務である。こうした問題に対処するためにもトイレ環境の改善が必要であるといえよう。

IV. 実践

4.1 実践 1

4.1.1 計画

本年度は、清掃活動にくわえ、昨年出来なかった2階の女子トイレと2階3階の男子トイレのペンキ塗装と描画に取り組むことにした。昨年の事後調査の自由記述欄に高学年の児童による「大人っぽいデザインのキャラクターを描いて欲しい」という記述があり、今年のキャラクターは昨年（森の動物たち）よりも高学年向けのデザインで、2階女子トイレには海をテーマとした人魚姫やイルカを描き、男子トイレは宇宙をテーマとして惑星や宇宙ステーションを描くこととした。

昨年はペンキを使って彩色したが、児童にとっては扱いが難しく時間内に仕上げるのが困難であった。そこで、本年は児童にも扱いやすく発色が美しい「ボスカ」で彩色することにした。事前（6月30日と7月7日）にボランティア学生と教職員で下塗りと下書きを行い、7月8日（土）と9日（日）に、ボランティア委員会の児童、ボランティア学生、教職員で彩色することにした。

清掃活動は、ボランティア委員会の子どもたちが全員参加できるよう、委員会の活動時間7月7日（金）にも実施する。また、ボランティア委員会で「みんなの役に立つ小物づくりがしたい」という意見が出されたことから、清掃活動や描画以外に製作活動を行うことに決めた。8日・9日には、附属桃山小学校のオリジナル手拭い²を使用した小物づくり（トイレトーパーホルダー）とオーストラリア研修旅行で姉妹校に贈るお土産（オリジナル手拭い）のラッピングも行うこととした。

4.1.2 実施内容

7日のボランティア委員会のトイレ磨きには児童13人が参加し、子どもたちは便器や床のタイル、洗面所などをタワシと中性洗剤でしっかりと磨いた（写真1）。



写真 1

6月30日と7月7日の準備作業は学生3人と教職員3人の計6人で行った。7月8日の参加者は子ども2人と高校生1人、学生7人、教員2人の計12人、9日の参加者は子ども5人、高校生1人、学生8人、教員2人の計16人である。ボランティア委員会に所属する子どもたちは約20人であるが、多くの子どもたちは塾やスポーツクラブで土日も予定があり参加することが出来なかった。この点は非常に残念であったが、参加した子どもたちやボランティアの学生は熱心に取り組んだ(写真2, 3)。



写真2



写真3



写真4



写真5

当日は学生と教員は9時、子どもたちは9時30分に集合、全体の説明を行ったあと、3階男子と2階男女トイレの描画を1時間実施した。15分の休憩を挟みトイレの清掃を行った。12時に昼食と休憩、午後は1時30分から再開し、小物づくり(8日はラッピング、9日は教室用トイレトーパーホルダーづくり)を行い、2時30分には休憩と活動の振り返りを行い3時に終了した(写真4, 5)。

4.1.3 参加者の感想と成果

参加した子どもたち5人は、下記のように自分で工夫して清掃活動に取り組むなど、非常に積極的に取り組む様子が確認された。

「みんなのためにがんばれたりできたのでよかった。今日の工夫は便器を洗って、その後ぞうきんできれいにふけたところです。これでみんなが喜んでくれたいな、と思いました。ボランティア委員会に入って正解だと思い、後悔はしませんでした。だから、これからもがんばってとりくみたい。(6年男子)」。

参加した学生にとって本プロジェクトは、トイレ環境整備の重要性について理解を深めるだけでなく、教育実習の事前学習としての機能も果たしていることが、次の感想からも明らかである。

「子どもたちが、暑い中一生懸命がんばっている姿がとても印象的でした。朝、みんなが自己紹介をするときに全員が『人のためになる活動をしたい』『みんなのために、きれいにしたい』と心から言っている姿を見て本当にすごいなと思いました。純粋に、そのように思えるということは普段から優しい気持ちを持っているからなんだろうと思います。私自身が子どもたちから学んだことがたくさんある1日でした。子どもたちと接する機会が普段はあまりないので、はじめのうちは、どのように接していいのか少しとまどってしまう場面もありましたが、人なつっこい子どもたちに助けられたような気がします。子どもにとって『学校のトイレ』という場所はあまり好まれる場所ではないと思います。汚い、臭い、怖い・・・というようなイメージを持つ子がたくさんいるかもしれませんが、桃小のように、子どもたち自身が描いた絵によって明るく優しい雰囲気のトイレがあるということは、とてもいいことだと思います。子どものころから、トイレの壁に絵を描くことにあこがれていたもので、桃小の子どもたちは本当に恵ま

れた環境にあるんだなと思いました。今日は参加して本当によかったです。ありがとうございました。(2年生 女子)。

以上のように、教育実習前の学生には附属学校の教育活動や子どもへの理解を深める上で、本プロジェクトへの参加は成果があったといえるだろう。また、学校におけるトイレ環境の重要性についても学生たちは理解を深めたといえる。

4.2 実践 2

4.2.1 実施内容

8月27日には附属桃山小学校の保護者と教職員による合同清掃が実施されたので、トイレ清掃を担当した保護者10人に対して井上がトイレ磨きと清掃を指導した(写真6)。トイレ清掃後、各トイレブースにトイレブラシを設置した(写真7)。このブラシはイタリアの若手デザイナーの作品であり、ピノキオの形をしている。子どもたちが清掃道具にも関心を持つことによって、トイレ清掃に積極的に取り組むことを意図したものである。さらに「自分の汚した便器を自分で掃除する」というトイレマナーを身に付けさせることも意図した。

また、児童調査では3人に1人が「紙がない」(トイレトーパーが補充されない)と回答したため、その改善策として各ブースに手作りのトイレトーパーホルダーを設置することにした。当日、清掃を終えた保護者とその子ども約20人でトイレトーパーホルダーを作成した(写真7, 8)。短時間で作成できるようにパンチカーペットを素材として利用し、子どもたちが好むよう目玉をつけた動物状のデザインにした。

4.2.2 参加者の感想と成果

参加した保護者の感想を以下に示す。

「スポットで便器の水を吸い上げて便器を磨き、家ではしたことがなかったので勉強になりました。暑くて少々きつかったですが、だんだんと美しくなっていくさまを感じとてもよかったです。」

「家のトイレ掃除でもこんなに手間をかけたことは、恥ずかしがらなかったです。今後のトイレ掃除に生かさせて頂きたいと思います。」

「3階、2階、1階と作業いたしますと、1階のトイレが改修されており、たいへん美しく使いやすいと思いました。・・・是非とも児童一人ひとりもトイレ清掃に参加し自宅のトイレも綺麗にしようと思えるようにしたいものです。そのためにも2階、3階のトイレ改修を一刻も早く実施して頂きますよう要求します。トイレ使用から、次の人への思いやりや社会性が育っていくことを期待します。」

「明るくて清潔なトイレは理想的だと思うので、戸に絵を描いて下さったり、掃除をしたくなるようなトイレブラシを設置して下さったり、また手製のトイレトーパーホルダーを考案下さったこと、とてもよいアイデアだと感心しています。みんなで使うからみんなで綺麗にし



写真 6

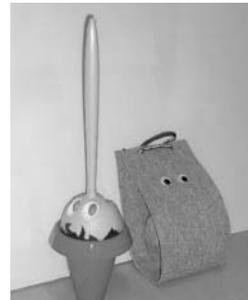


写真 7



写真 8

ようという「意識」を強くもつことが大切だと思います。】。

以上のように、参加した保護者のトイレ環境の整備に対する意識が高まり、トイレが子どもたちの健康や社会性を育む場であることを改めて認識したようである。そして、保護者は一連の実践活動に理解を示すとともに、全面的なトイレ改修を求めている。このように、保護者とともにトイレ環境について考え実践し改善する活動は、学校だけでなく自宅のトイレ環境やトイレマナーの改善に繋がり、非常に効果的であると考えられる。

V. 事後アンケート調査結果

5.1 事後アンケート調査

実践1の直後に、活動内容を記載したポスターを各階のトイレに掲示し、ボランティア委員会の子どもたちと大学生がトイレ清掃とペンキ塗装を行ったことを知らせた。2学期の始業式には、全校生に藤田がトイレブラシの使い方を指導した。

そして、3ヶ月経過した12月初旬、事後アンケートを附属桃山小学校の全児童（442人、回収率100%）を対象に実施した。調査項目は①改善活動に関する認知、②トイレの使用頻度の変化、③清掃状況の変化、④トイレブラシとトイレトーパーホルダーの使用状況、⑤改善に対する感想（自由記述）、⑥今後の改善希望（自由記述）である。結果は以下のとおりである。

5.1.1 改善活動に関する認知

「トイレが変わったことを知っていますか」という設問には、82%が知っていると答え、知らないが18%であった。今回、清掃と塗装を行った2階女子トイレと2・3階男子トイレの使用経験を尋ねたところ、使用したことがある児童が84%、無い児童が16%であったので、改善したトイレを使用している児童はほぼ全員が活動を認知しているとみてよいだろう。

どのように変わったかを尋ねたところ、「トイレブラシがある」と答えたものが91%、「絵がかかっている」85%、「トイレトーパーホルダーがある」83%であり、トイレブラシ、塗装、トイレトーパーホルダーの認知度は高い。これに対して、「明るくなった」は22%、「においが少なくなった」14%、「便器がきれいになった」13%であった。トイレの3Kである「汚い」「臭い」「暗い」についての改善は十分とはいえないが、それでも2割の児童は改善されたと感じている。

トイレが変わったことに対する感想（自由記述）をみると、「きれいになった」87人、「明るくなった」49人、「ブラシがある・を使った・使いたい」40人、「使いやすくなった」25人、「かわいい」22人、「気持ちよくなった」13人など肯定的な意見が多い。とくに、低学年ではブラシに関する記述が多く、「ピノキオブラシがきたからきれいになった」「トイレに入ろうとしたら、ウンチがあったから、ほんとはいやだったけど、がんばってピノキオブラシでこすりました」といった記述がみられた。そのいっぽうで、「においはまだある」15人、「もう少し明るくして欲しい」10人、「綺麗にして欲しい」9人のように、さらなる改善を求める意見もみられた。

5.1.2 トイレの使用回数および清掃状況の変化

トイレの回数の変化を尋ねたところ、改善前に比べトイレの回数が増加した児童は17%、変化なしが68%、以前に比べて減ったが15%である。回数が増加した児童の割合とトイレが改善されたと感じている児童の割合はほぼ同数であり、改善されたと感じた児童は以前よりトイレの回数が増える傾向にあるとみてよいだろう。いっぽう、以前に比べて減ったと答えた児童が15%であったのは調査時期が冬期であったことから、改善以前の夏期に比べトイレ回数が減少したと考えられる。

トイレ掃除当番の児童を対象として清掃態度の変化を尋ねたところ、改善によって31%の児童が「トイレ掃除をがんばるようになった」と答えている。ただし、昨年度の結果と比べると、「トイレ掃除をがんばるようになった」児童の割合は8ポイント減少している。これは、活動時間の制限のため男子トイレのブース内の塗装が不十分であった点が要因である可能性が高い。トイレ内が綺麗であればあるほど児童の清掃意欲も高まる傾向にあり、昨年に比較して不十分な点が清掃意欲の向上を妨げたと考えられるのである。この点からもトイレの早期改装が望まれる。

5.1.3 トイレブラシとトイレットペーパーホルダーについて

「トイレを汚してしまったとき、トイレブラシで掃除しますか」という設問に対し、「いつも掃除をしている」と答えた児童は25%、「ときどき掃除をしている」は13%、「していない」が62%であった。トイレブラシを使用している児童は4割である。使用していない児童にその理由を尋ねたところ、「汚さないから」が85%、「時間が無いから」4%、「掃除が嫌いだから」4%、「使い方が分からないから」2%などであった。したがって、大半の児童は汚してしまったらトイレブラシを使って掃除しており、トイレブラシの効果は確認されたといえよう。しかし、4%の児童は「掃除が嫌いだから」掃除しないと答えており、トイレマナーに関する指導が必要であるといえる。

「トイレットペーパーが無くなったとき、次の人のために入れてあげていますか」という設問では、「いつも入れている」と答えたものは23%、「ときどき入れている」16%、「入れない」61%であった。「入れない」と答えた児童にその理由を尋ねたところ、72%の児童がトイレットペーパーが「なくなったことがない」と答えた。その他の理由としては「入れるのが嫌だから」8%、「時間が無いから」7%、「入れ方がわからないから」6%などである。このことから、多くの児童は使ったあとはトイレットペーパーを補充しており、ホルダーの効果は確認されたといえよう。しかし、2割程度の児童はトイレマナーを守っておらず、この点に関する指導が必要である。

5.1.4 改善希望

「これからトイレをどのように改善したいですか」という設問には、やはり、昨年度と同様、「明るく綺麗にして欲しい」という記述が大半を占め、洋式にして欲しいという意見も多数みられた。子どもたちは、学校トイレに家庭トイレと同等の快適性をもとめており、臭いの除去についての改善を求める意見やウォッシュレットや消音機の設置をもとめる意見も複数記述されていた。

また、モップや雑巾などの掃除用具を整備して欲しいという意見やマットやスリッパの交換

など、清掃活動に関する意見も記載されており、子どもたちの清掃活動に対する意識が向上している点も確認された。

昨年度と同様、本年度の実践活動も子どもたちのトイレ環境の向上に一定の役割を果たしたといえる。しかし、根本的には全面的な改修が必要である。2年間の実践の中で子どもたちのトイレ環境に関する意識は高まっており、早期に改修を行うことにより教育的な成果が期待される。

Ⅵ. おわりに

本プロジェクトでは、昨年に引き続き附属桃山小学校のトイレ環境の改善を通じて、①健康で快適な生活を営むことができる学校空間の実現と②生活意識の向上と主体的に生活をつくりあげる力を養成することを目指し、あわせて③学生たちの指導力、実践力の育成も目指した。

本年度は2階女子トイレと2階3階男子トイレの改善に取り組み、磨き清掃とペンキ塗装を児童・学生・教職員が協力して実施した。さらに、保護者とともにトイレブラシとトイレトーパーホルダーも設置した。

これらの活動によって2割の児童はトイレ環境が改善されたと感じ、トイレの使用回数が増加した。したがって、目的①はほぼ達成されたとみてよいだろう。目的②についても3割の児童が「トイレ掃除をがんばるようになった」と答え、トイレブラシやトイレトーパーホルダーも活用されており、生活意識の向上と行動の変容が確認された。

本年は昨年の成果を踏まえての実施であったので、企画・調整・実践・評価というプロセスを短期間で行うことは比較的容易であったが、それでも事前準備や当日の活動、データ分析など様々な業務をプロジェクトに参加した学生たちが分担し行った。こうした一連の活動を通じて、学生たちが附属桃山小学校の教育活動や子どもたちへの理解を深めた点が学生の感想文から確認された。したがって、目的③に掲げた本プロジェクトに参加した学生の指導力、実践力は向上したと考えられる。

学生調査との比較で示されたように、児童は大人よりもトイレ環境から影響を受けやすく、学校トイレの整備は子どもの健康を守る上で極めて重要である。さらに、トイレ環境は子どもたちの社会性を育てる上でも大きな役割を果たす。

2年間のプロジェクトによって、附属桃山小学校のトイレ環境の整備は一定の成果が得られたが、さらに成果を挙げるためには全面的な改修が必要である。その場合、これまでの経験を生かし、児童と教職員がトイレ改修に計画の段階から参加する利用者参加型のトイレづくりを実施することによって、大きな教育的効果が期待される。予算の問題はあるが、その教育的な意義を考慮し、早急に実現を望みたい。

本研究は、平成18年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト経費（学長裁量経費）「京都教育大学における生活環境改善プロジェクトー大学と附属桃山小学校トイレ改善プロジェクト・男子学生寮食堂改善プロジェクト」（代表 井上えり子）による研究成果である。

- 1 井上えり子，藤田加代，松本歩子，垣内良友，大嶺武也，2006 年 3 月，「子どもたちの生活とトイレ環境－京都教育大学附属桃山小学校におけるトイレ改善プロジェクト－」，京都教育大学教育実践紀要第 6 号，pp.135 ～ 144
- 2 オリジナル手拭いは知的財産 GP デザイン部会でデザインしたものである。